

橋本朝生編

大花虎光本狂言集

四

古典文庫

橋本朝生

大
我
書
院
圖
書
館
編
章
藏
印
蘇
工
業
學
院
圖
書
館
藏
印

狂言集

四

古
典
文
庫

平成四年五月二十日印刷発行 非売品

集言狂本光虎蔵大
四（完）

編 者 橋 本 朝 生

発 行 者 吉 田 幸 一

印 刷 者 白 橋 印 刷 所

発行所

114

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古 典 文 庫

電話（三九一〇）二七一七
振替口座東京九・一四五九七番

目次

凡例	七
卷十三	二
岡太夫	三
鬼瓦	三
瘦松	二六
鞍馬参り	三五
蟹山伏	四四
隠笠	四六
人馬	六二

腰祈·····	七六
舍弟·····	八四
呂蓮·····	九〇
卷十四·····	一〇一
船渡聲·····	一〇三
秀句傘·····	一二七
名取川·····	一三〇
八句連歌·····	一三七
雷·····	一四九
三人夫·····	一五六
禁野·····	一七三

悪太郎	一八二
引括	一九三
若市	一九九
卷十五	二〇七
音曲簪	二〇九
因幡堂	二一九
悪坊	二二五
文山立	二三三
金津	二四〇
筑紫奥	二五〇
萩大名	二六五

瓜盗人……………二七九

仏師……………二八七

伯母ヶ酒……………二九九

卷十六……………三二一

唐角力……………三二三

鶏聾……………三二六

子盗人……………三三五

地藏舞……………三三三

成上り……………三四一

老武者……………三四六

連尺……………三五七

茸山伏	三六六
盲女座頭	三七二
芥川	三七五
清水毘沙門	三八一
角水	三八六
鈍言艸	四〇一
泣尼	四〇八
本奥書	四一八
書写奥書	四一八
覚書	四一八
解説	四二二

曲目索引·····	四五一
正誤表·····	四六〇

凡例

一、本書は、大蔵流八右衛門家七世虎光の狂言本全十六巻を、転写本によって、四冊に分けて翻刻するものである。

一、巻十三・十四・十六は、文政六年山岸清斎書写大蔵虎光本（吉田幸一氏蔵）、巻十五は、半田氏所持大蔵虎光本（京都大学文学部蔵）を底本とし、文政五年岡田信言書写明治四十一年橋本賀十郎転写大蔵虎光本（関西大学図書館蔵）との本文異同を示す。ただし、巻十六の「唐角力」は岡田信言書写本には欠けている。

一、底本を忠実に翻刻することを原則とするが、通読の便宜や印刷上の制約を考慮して次のような処置を施す。

1、段落を適宜設ける。

2、謡い物のゴマ点は省略する。コトバとフシを区別するため、各役のはじめの肩鉤（ゝ）をコトバの部分は「、フシの部分はへに改める。

- 3、文字遣いは底本通りとし、混用されている片仮名もそのままとする。
4、漢字の異体字や旧字体は通行の字体や新字体に改めるが、一部特殊なものを残す。

(例) 哥 寫 嶋 附 餘 厂 广 艸

- 5、特殊な合字・連体字は通行字体に改める。

(例) へ↓より 一↓こと

- 6、当て字・誤字も原則としてそのままとし、意味のとりにくい場合には適宜正しい表記をへゝで括って傍記する。

- 7、字体の紛らわしいものは、文意によって判断する。

(例) 刀・力、矢・失、鈍・純、貝・具、結・詰、折・打、最・宛

- 8、送り仮名は小字で記されることが多いが、区別しない。

- 9、反復記号もそのままとするが、片仮名の反復にしばしば用いられる「こ」は「、」に改める。

- 10、ト書き等は割注で記されることもあるが、すべて一行書きとする。

11、欠字・判読不能文字は□を当てる。

12、謡い物の部分は、一句で一字空ける。この点について山中玲子氏のご協力を得た。

13、各巻題簽の曲名のうち数曲に合点が施されているが、朱によるものである。

14、一部に朱によって読点「、」が加えられており、これはそのままとするが、大部分には読点がないため、句点「。」を加える。ただしこれは上演の際の息つぎを示すものではない。また各役の終りは省略する。

15、また朱によって（まれに墨でも）、振り仮名・送り仮名・訂正が加えられており、これらは本文右傍に示す。濁点・半濁点を付すもの、削るものも振り仮名の形で示す。見せ消ちは傍線を施す。ただし圈点や欄外注記は省略する。

16、役名を補ったり読みを示したりするなど、校訂者が補記するものはすべてへゝで括って区別する。

一、本文異同は、文字遣いについては示さず、発音された状態で相違する場合に

(一) に入れて示す。役名・コトバとフシの相違も同様に示す。また次のような処置を施す。

1、清濁の相違、連声になるかどうか、反復記号の相違・回数、同時に発せられる「重白」の順逆、当て字、役名の異表記、ト書きの異表記などについては異同を示さない。

2、相違する語句の前の同一語句から引くことを原則とするが、明らかに置換可能のものはその語の直後に記し、不明確なものは相違該当箇所の上を一字分空ける。当該箇所のないものは(ナシ)とする。

3、曲名については、文字遣いまで含め、相違する場合は全形を示す。

＼呂	＼舎	＼こ	人	隠	蟹	鞍	瘦	＼鬼	＼岡
		し		が	山	馬	ま	かは	太
蓮	弟	祈	馬	さ	ふ	参	つ	はら	夫
					し	り			

十三

題
簽

岡 太 夫

舅（ナシ）「是ハ此当リニ住居致者で御座ル。今日ハ最上吉日なれば
聶殿の見へらるゝはづで御座ル。掃除等を念のいれて申付ふと存ル。

ヤイ／＼ 太郎官者居かヤイ 太郎「ハア、舅「居たか 太郎「御前ニ
居舛ル 舅「念のふ早かつた。汝を呼出ス事別成事でも無イ。けふハ
最上吉日なれば聶殿の見へらるゝ筈ぢや。掃除等も（を）念のいれて
せひ 太郎「畏而御座ル 舅「又聶殿の見へられたならばこなたへと
（こなたへ）申せ 太郎「心得ました 舅「エ、イ 太郎「ハア、

シテ「是ハ人のいとふしがる（いとしかる）花聶で御座ル。今日ハ

最上吉日で御座ルニ依而舅の方へ賀入を致ふと存て罷出た。先^{さき}邀^{まね}りく^くと参ふ。イヤ誠ニ賀入と申物ハ辱敷者で背戸からも垣からも眼斗りぢやと申舛ル。あれへ参たならバ随分と億せぬよふニ致ふと存ル。イヤ参る程に是て御座ル。先案内を乞う

ヘシテ「物申案内申 太郎「いや表ニ物申と有。案内とハ誰ぞ シテ

「物申 太郎「どなたで御座ル シテ「最上吉日で（なれハ）賀が参たとおしやれ 太郎「扱ハ賀殿で御座ルか シテ「中く 太郎「其通り申ませふ。暫夫ニ待せられひ シテ「心得た 太郎「申く賀殿の御出被成て御座ル 舅「何ぢや賀殿の見へられた 太郎「中く 舅「賀殿にハかふ通らせられいと言ふぞ（いわふす）。又供の者をバとふ侍へ通シて汝（か）饗^{おもてな}応^{おこ}せ 太郎「イヤ賀（賀殿にハ）唯御老人で御座ル